

585

報新濱横

篇三十第

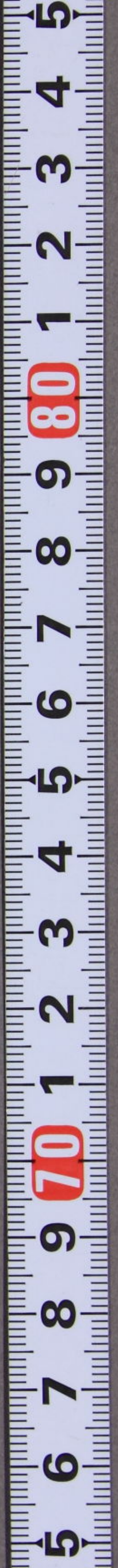
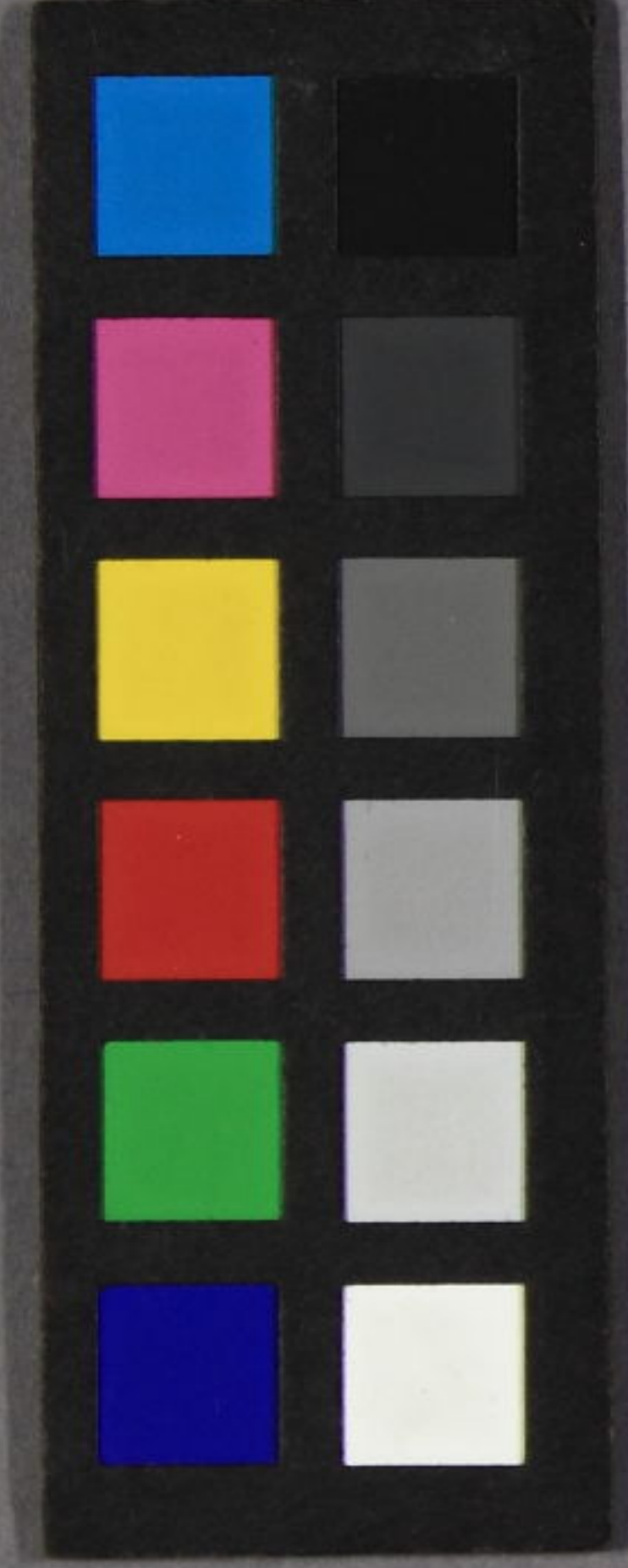
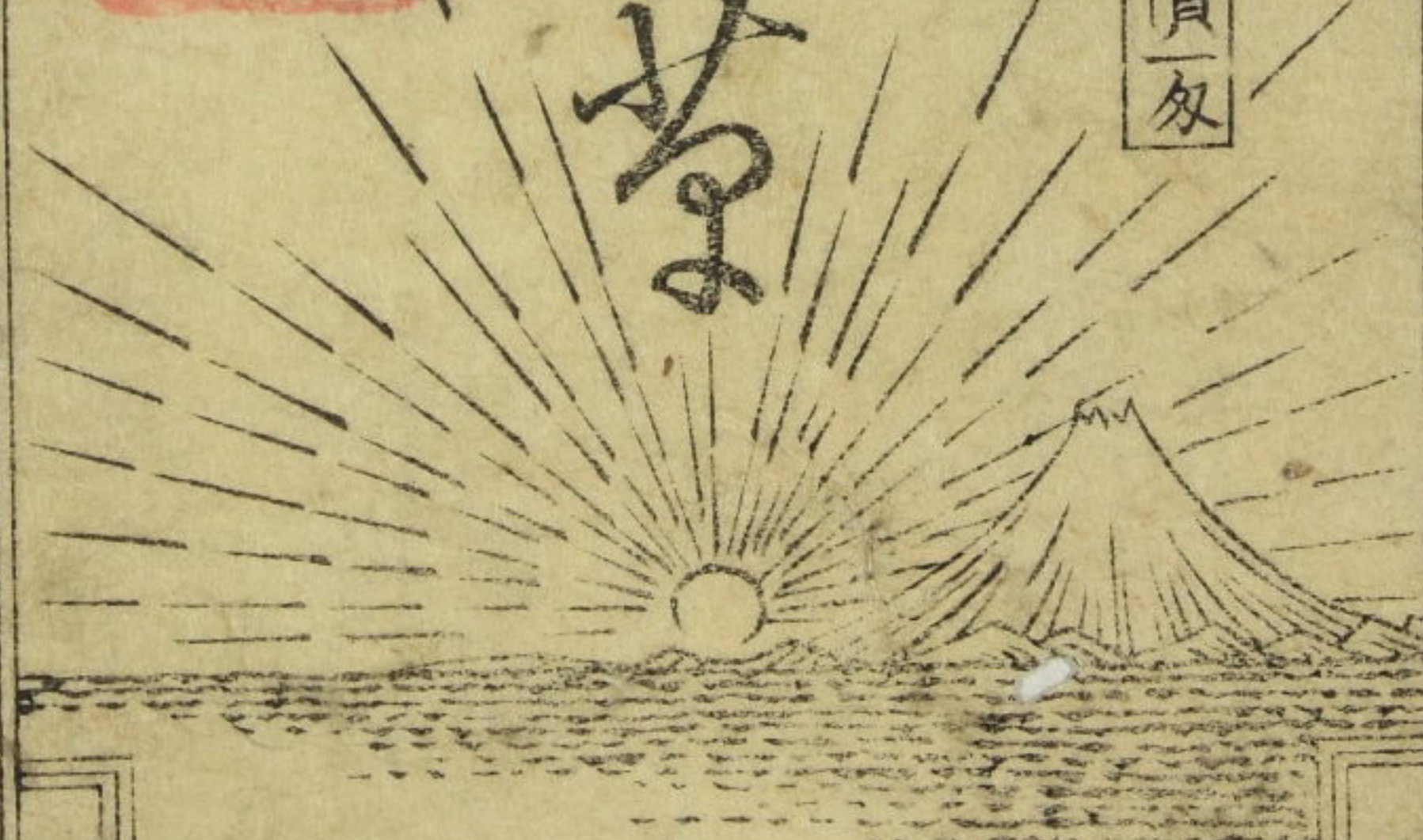
慶應四戊辰年

九十三番ウエシリート

定價一匁

*Ginji
Kacida*

のほろ



特
7387
11

慶應四年癸丑

十三番ウエリト

實買

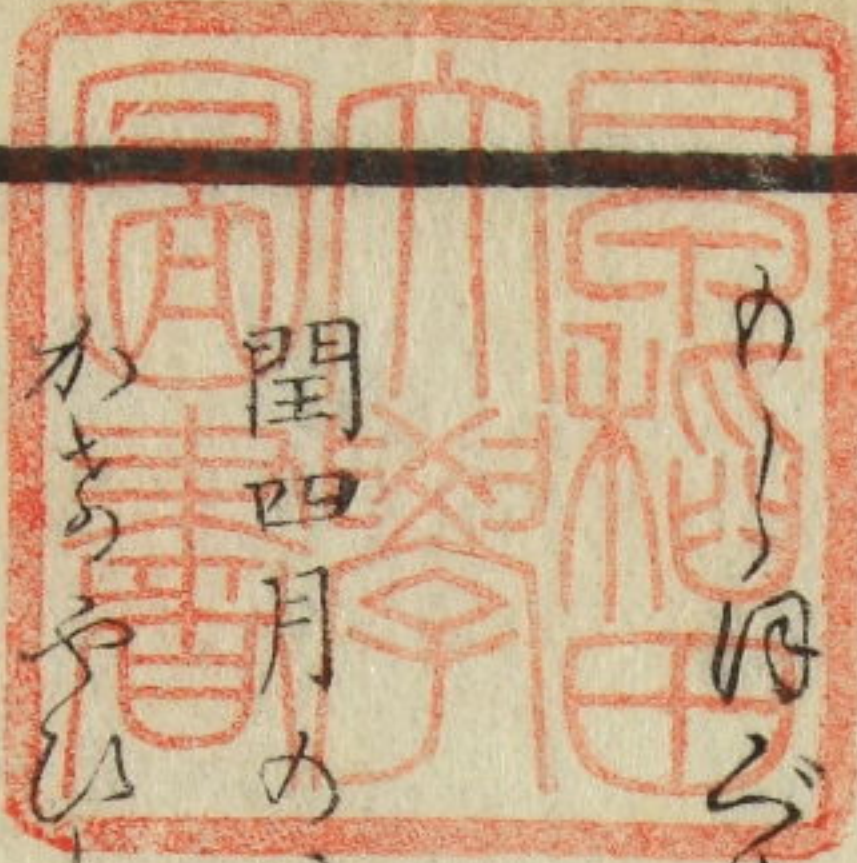
おのて



めしつ母ぶき第十三篇

五月晦日

西垣文庫



奥州よりきこりて人のともがごと

閏四月のほどもごろ會津彦一仙臺このころはく
かきやひ一が會津のまうすあひこままであたる
領地を半分をとり天朝へさしつゝあませうを連さ
ぶのんあんなごころのまうとつゝに仙臺でやめられ
てのまうをり今少一おごりちのまうをば某のまうに
そのまをのしひませうとつゝども會津の家臣ども
不兼知めきこの相談もこのまをばさるうあつてこの
正月の伏水で先鋒をりて一番砲をうちりて

母十三

二三人の首をきつて押さへておぼしき事さすれども其
よにやうにちのうらひませうといふ會津のこたへ
この時のめいどのいともをうあぶにせし今むりこと
をうらと仙臺をすさつふいその人がおあいのうら
家老重役の人の首を押さへておぼしき事さすれども
て因循たることでのいけません君をうらめらるれば
臣しするいあうりまへのことよていといひたるにす
會津の云をちらんめいといふ國中のこたへに死を決
せりといふ仙臺の使者のこたへやうの國中のこたへ
死を決したるはほどのりたるは家老の三

人づゝおおろしき事さすれどもいさけらるるあつと
こくたびぐく押さへていさけらるるあつと
仙臺のいふこたへにちのうらと會津でも決着する
ゆゑそのおしむらあつと仙臺の使者田崎土佐の仙
臺へかへて軍事總督九條殿へち上るいこの奥州を
農業よりも養蠶をおもにいさけらるる今農業
にもちのうらといさけらるるいさけらるるにゆへに
戦争のほしきなりちのうらと百姓のちんぎふなり國
産のちんぎふもなりて上下ともちのうらとにゆへに
且い又會津もこのちのうらとにゆへにちのうらとに
砲護

といへば主人源慶喜を朝敵お押さへて候は
 ましたく容保がやちどはくゆらくあつく罪を謝し
 此間をふとど會津をもちまきくすまて押かりをさして
 てらざるりまへし押りのしらの慶喜さへも非常此寛
 典の處せしむしほづのこことたきまばその臣の會津
 をさのりせおひらきしなされぬといふわきありしをまに
 中ふちあど中あけたるに九條殿もゆとりもめりあり
 こそくいふさの押かりにちるさるおほしめし鹿
 けく不兼知なる押りむれされども軍中のこことる總
 督の權めく押さざるにありてもくさしぬの趣

かねその勅定を違はしつるまこといふいとて仙臺より
 といへば押死せる兵を同月十二三日ころより圍を解て
 といへばりそまよりまへ仙と會と二三度もたつひ
 してこそもいられどもめとより私怨にあつねはさむい
 敵もも押りさるばるたつひのまほりをしてたりとぞきま
 くと奥羽の諸侯ともあつく一致して兵を押し候こと
 をおさむいつたよりそのわきありハ會津の荷檐をとる
 にもあつば徳川家の左祖をさるりもあつばたつ
 上洛して 主上一奏聞したるころとがあるゆゑ
 たりされどもすでに乱世とありし時節柄され

兵仗ははれりゆづりもあはぬそのまけい志を
 たるやつがあまがまのりもあはぬつりて
 たりその奏聞したいといふわきへこねて萬民の困
 苦をさすのせうもあはぬ御仁惠の
 叡慮の物もむきあはぬたびく
 たれども乱ふ乗とて
 乱入して無罪の小民を殺戮しあはぬ合戦て家
 産をうしひ親をやれらるる妻孥にうしひ
 たるはさるるものもあはぬ何業によらば
 あはぬ萬民を土炭ふるもあはぬ

の押あまのちづみなりこれの押あまの
 主上のあがめはあはぬあるまじき
 天皇の押あまもあはぬ外の人
 うらみを報するにあらぬこと
 いまことに國のためあはぬことあり
 よく奏聞やあはぬ
 主上のまことのおぼしめは
 萬民の志を
 皇化の沐浴し太平の御代
 たいのませうやうにたいのまご
 勅諭でいささをやめるが
 米澤仙臺

會津の三侯とその外の諸侯ありまうて評議を
さぶめたりしそは上洛のされてい野州までお
いししるるもいしりさもかくもさかくいしきごのやま
ねば百姓もさほる職人もさなるほろずもさなる
やまぶししもやらしやもさびのやもさなる商人がのち
せんさなるやごまぶごめのごちやくめらめ太平より
てんごさういまし

○京地よりきりりし人めをちり

京の東山おれぬといふ歌妓ありありその藝はいふ
までんなく上りなり手もよくうたうさをもよく

よきものりしごおきさなるりし時まづしり
ひとりのおやをやしなひうねていりしほとみちり
あつりおすもなるひとお藤七といふをさしりあり
りしりあねもちにもいふささなるこのおきさぬが
おやも孝行あるをあられさすをりくうねまののらひ
ものたをさすもいりささどしなりなるほどにさ
をだくそのおやしふありさをおきさぬ此藤七が
はまにならんそくおをのにゆくさ念のちだりを結て
月日のすさをたのしきお妓女おたりて世をわたり
ありこのころ九州ごこの武士にも度々のいささも

高名たかね―たるままが―とのいへる人このおきぬがとめ
よれふほほとておほくめうねをもとて―まげはしのひ
たてとくさままぐふらどたれどもこのおきぬきつらざり
そのまじこれほどにころをつくすふたりにあまさん
とくせんき―たりまじぶらの藤七あることをさう
てやぐくその夜うた武士むをのに藤七をころす―
にありおきぬがころおひゆるべ―さそはらるひの
とそごのままこの空にうた武士まこさるうにきつら
ておきぬをよびて三味線のせくらせなご―てつね
めころくつそびにありおきぬもうらみなるうほをも

とせバちあまがたてのにうちさうひけらじつ此武士よ
さけおほくめをせくつらもまうなまてく―くめはは
つはとそをによりそひたりなるを武士ハおきぬを
そりておきぬをにまうりおきぬこの武士をよきにゆし
たほ―てうへふめりきてをやくおび帯のあひだよ軍
短くちカをそりのぐ―てさうをふりつよとえ―この武士
めおまのつにつらもさほるばらうふつたてにたりさて
なんごう木音あまのひもあるい何―とまうや首尾しゆびよく夫の
かたれをうちとめ―ぞとくやぐくその武士のうらまを
ぬきらびをきつりてめちさひしが藤七がちこのに持か行ゆきて

はるおきおきぬも自害トしたりあるはらまじよの中の
あつらひささとぞたりになる辞世トのうらことと

物それぬをたぞのんよりハシでのやま

よらづのこのはもをそとにこえあん

○ 雑報

このころあらんすめ大軍艦七隻トよこをるぬふきつり
て錨泊びせりたふふのゆゑともはけりがうとつと定ちて
あつらひささのあつらひささのうらことと

西垣文庫

文庫 10

7387

11

西垣文庫
十一

六